

---

# タナトス

紫恋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タナトス

### 【Nコード】

N3370I

### 【作者名】

紫恋

### 【あらすじ】

タナトスオンライン

これは仮想実体験型オンラインゲームである。

黒髪の大鎌使い『首切り』阿修羅が、青髪の雷魔法の使い手『雷導』メシル、黄色髪の二刀剣使いの『奔雷』恋、そしてワケアリの聖術使いの『白巫女』クツキと共にギルドを作るところから始まる。

## 序曲（前書き）

初投稿です。

稚拙な文で申し訳ありませんがよんつでいただければ幸いです。

## 序曲

プシュー・・・

不愉快な効果音をたてながらそれは倒れた。

俺の足下には鬼の亜人であるゴブリンの体が少なくとも40セットはあった。

40セットと表現するのはその屍たちのすべてが首を切断されていたからだ。

俺のこの世界での名前は阿修羅である。そして・・・

「え？あれって首切りじゃね？」

付近にいたプレイヤーはこっちをみて叫んだ。

そう。この世界では二つ名システムというものがあるそれはプレイヤー個人の能力、プレイスタイルなどによってゲームシステム側から与えられるものである。例えばこの『首切り』に関していえばモンスター、プレイヤー区別なく首への攻撃ダメージが三〜五倍までまで膨れ上がるものだった。少々使い勝手は悪いが気に入っている。ちなみに二つ名は基本唯一無二のものであり、交換不可である。まれに特殊であるが複数存在するものがある『匠』なんてものがその一般例である。長らく一人しか存在していなかった匠のプレイヤーがつい最近もう一人取得者が出た。阿修羅はそのことは小耳に挟んだがあまり興味もなかったので調べることもしなかった。

「さてと・・・」

俺は先ほどのゴブリンがドロップした。物を拾うとも聞いた街への

帰路いつくのであった。そこは中世ヨーロッパを思わせるような街である。

中心街『グラディオス』それがこの街の名前である。

この街はすべての地域の中心に位置し半ばプレイヤーたちの溜まり場や待ち合わせ場所に使われている。そのせいかいつでも賑わっており、フリーマーケットにいけば大抵のものは手に入る。

フリーマーケットとはプレイヤーが要らないものを売ったりレアなアイテムを高額で売ったりする場である。

「おーい！」

するとどこからか声がした。

「っお！メシルか。」

振り返るとそこには青髪を腰あたりまで伸ばした女性がいた。年齢は俺と同じ18くらいだ。

4

「っお！メシルか。じゃないでしょ！！また東草に行つてたよね？」  
東草とは先ほどまで俺がいた場所だ。『東の草原』推奨レベル10  
LV、出現モンスターはゴブリンのみである。

「ああ」

「何しに？」

メシルは少しムツとしながら聞いてきた。

「レベル上げに」

もちろん違う。でもそろそろいわないといけない・・・

「ふーん。84LVランキング二位である首切りさんはゴブリンで

「LVあげてあるんだあー」

少し嫌みぼく彼女は口撃してきた。

「はぁ．．．．．それでさぁ．．．」

いうしかない。今度こそ

「ん〜？」

少し改まった雰囲気になった。

「え〜とさぁーギルド作らないか？」

## ギルドと試練（前書き）

こんちわぁ紫恋です。

いや相変わらず稚拙で申し訳ない。  
次話から戦闘となります。変になったらすみません。

## ギルドと試練

ギルドとはプレイヤー同士の集まりである。ギルド入隊は1LVからだが多くのギルドが入隊条件を提示してくる今ではコネでも使わない限り1LVからの入隊は難しいだろう。

ギルド作成にはLVを40まで上げるという前提条件から始まり、いくつかのクエストを受けなければならない。またギルド作成時には作成料として1000万メルキルが必要となる。1000万メルキルはランカーである阿修羅にとっても大金だし、クエストもとてつもなくめんどくさいものだった。

よってギルドの数もプレイヤー人口およそ100万人に対して14個と少なかった。

7

「・・・で返事は？」

緊張の面持ちで青髪の女をみる。

「アッシュ本気？」

こちらも真面目な顔で切り返す。ちなみにアッシュていうのは、俺の愛称だ。名付けの親は、現在この世界で五番目の女だ。いやあれはただのガキだ。

「ああ」

頷きながら肯定した

「そっか、いいわよ。」ため息をつきながら青髪の女は答えた。

「本当か!？」

沸々と喜びの感情があふれてくる。しかし次の彼女の一言でそれは溜め息となつて出て行くことになる。

「ただし、明日の夕方までに青石を持ってこられたらね。」  
彼女はイタズラっぽくいった。

青石とは主に魔法職の武器である杖それも氷属性付加武器の作成や合成に使われるものだ。

入手方法はここグラディオスから北へ行くことで辿り着く街『雪中街』『スノーウィン』の巨大ダンジョンのボスである『スノウマン』が低確率ドロップである。

ただこのダンジョンにしてもボス『スノウマン』にしても阿修羅の敵ではない。何故なら『スノウマン』討伐の推奨レベルは45LVであるからである。

ここで危惧すべきはそのドロップ率の低さである。どういう設定になつているかは知らないが情報サイトを覗いてみたところ体感では3%~5%程度らしい。敵はボス級モンスター。もちろん乱獲はできないしスノウマンの場合一度倒すと三時間湧くことはない。

現在午後2時

多くても10匹と狩れまい。正直阿修羅でもどうしようもない。

「なっ!なあそれ本気か？」

焦りながら聞く。

「当然よ。」

青髪の女メシルは澄ました顔で答える。

「せ、せめて一週間」

「却下!!」

ノータイムで提案は一掃された。

「っち！わーったよ。絶対持つてきてやるからな。」

そうして阿修羅は青石取得のため『スノーウィン』にむかうのであった。

## ギルドと試験（後書き）

感想 疑問もしあったらレビューよろしくお願いします。

## スノーウィン（前書き）

かなり久しぶりの投稿になりました。

これは書置きしてあったものですがよかったですら読んでください。

## スノーウィン

雪がシンシンと降っている。俺は例によってスノーウィンダンジョン『雪の森』にきている。

「おりゃ」

ザシユ

ポトツ

俺の武器である大鎌『紅月』を目の前の熊『ベア』の首にかけ引いた。

するとベアの体はもともと二つだったかのように分かれた。

「ふう・・・あとちよつとだな。」

今回のターゲットである『スノウマン』はこのダンジョンの一番奥にいる。

それから出逢うモンスターを尻払いながら進むと少し開けた場所についた。

「ここか・・・」

そこは閑散としていた。

ある一点を除いては・・・「ウオオオオオオ！」

そこにいたソイツは片手に3メートルはあるだろう木を持って近づいてきた。

ここの主である『スノウマン』である。

「俺って運いいんじゃない？」

運よく俺以外この場にはいない。つまり誰の邪魔もなく狩れるというものだ。

「まずは初発だ。散華！！『サンカ』」

阿修羅は紅月を大きく振りかぶりスノウマンの腹に二太刀入れた。

「ウオオオオオオ！！」

スノウマンは傷を押さえながら戦闘体制にはいる。

しかし先ほどの二太刀によってスノウマンのHPバーは半分以下になっっていた。

「一気に終わらす！！首切り！！」

スノウマンが手に持った木を振り上げた刹那、

ザシュ

阿修羅の大鎌が首にかけられヒカレタ・・・

大鎌固有スキルである『首切り』はその名の通り瞬時に相手に近づき、首を切り落とすスキルである。

「はあやっぱでないか・・・」

阿修羅はそれからもスノーマンを狩り続けた。そして五匹目で奇的に青き石を見るのであった。

## 集合（前書き）

溜め込んであったのでやや修正してのアップです。  
ややながくなりましたがよろしくお願ひします。

## 集合

青石を獲得した阿修羅は今とてもピンチであった。きっと誰であっても抗えないものに襲われていた。

「ねみい・・・」

睡魔である。

そう彼は5匹もの『スノウマン』の討伐をしたことによりかれこれ20時間ほどぶっ続けで寝ていないのだ。いくらゲームに慣れてるとはいえぶっ続けは厳しい。

「よし！寝よう。ふぁー」

大欠伸を欠きながらその日は眠りについた。

「あー寝たりねえ・・・」  
アツシユは中央街『グラディオス』の酒場「リランチ」にきていた。店内はとても落ち着いていて酒場というよりは喫茶店といったほうが正しいであろう。

「たしかにメシルここって言ったよなあ」

ここはメシルが指定した場所である。そろそろ約束の時間のはずだ。

「あーッ！！あっしゅー！！」

「メシルおせーじゃねブヘッ！！」  
ふと阿修羅が声が出たほうを向くと小さな女の子が阿修羅の顔面を掛けて突っ込んできていた。こんなことをするのはこの世界には一人しかない。

「毎回突っ込んでくるのは止める。」  
阿修羅は半ば諦め気味にそのショートカット気味の黄髪の子にいった。

「はい」  
そして毎度のことながら反省の色が見られない返事・・・

今突っ込んできた女の子こそこの世界で3番目の女・・・いやガキ

だ。

名前は「恋」そして二つ名は『奔雷』。その小さな体からは想像できないほどの戦闘センスがある。武器は二刀剣である「蒼雷」と「紫電」である。

二刀剣は連撃性に優れているが一撃の強さは両手剣や斧と比べるとかなり劣る。さらにリーチでも劣るため超至近距離での戦闘が基本となる。もちろん敵に近づかなければならないためダメージを食らう機会は相当なものだ。よって二刀剣を使うプレイヤーはほとんどいない。いや『使える』プレイヤーがいないのだ。そんな武器で3番目まで上り詰めた。「恋」のすごさはこの世界では一つの伝説みたいなものになっている。

たとえば大型龍族モンスターである炎龍『バハムート』にたった一人でつつこんでいく少女をみた。とかこりやまた巨大ダンジョンそれもふつうランカーでもPTを組んで突入するような場所からのこのこと出てくる妖精をみたとかそんなのである。妖精というには凶暴かもしれないがおそらくそれも恋のことである。

そもそも恋の強みはソロで大抵のことはこなせることである。ダンジョン攻略も然り、大型モンスターの討伐もまた同様にである。そのためこれまでもランカーでありながらギルドに所属していなかったであろう。

二刀剣は二刀一対であるため。二刀で一つの名前がつけられるのが普通である。しかし彼女の持つ武器は一刀ずつに名前がつけられている。おそらくレア武器であるのだろう。

この世界にはレア武器、レアアイテムなど特定の敵からまれにゲッ

トできたりある一定の条件を満たさなければもらえないアイテムなどを総称して『魂を宿すもの（アーティファクト）』と呼ぶ。もちろん今阿修羅が持っている『紅月』や青石もその一つである。またそれにも等級というものがあり、レア度の低いものからレア、レジェンド、エピック、ユニークである。

ユニークに関してはゲーム内で1つしか存在しないアイテムであり装備アイテムのみに存在する等級である。あまりにもお目にかかれない代物であるためプレイヤーの間では『神器』とも呼ばれている。

「ねえあつしゅーメシルまだなのー？」  
む？なぜこいつからメシルの名前が出てくるんだ？まさか……

「まさかお前もメシルから？」

「うん！」

恋は笑顔で答えた。

そうか……だいたいわかってきた。まあいいや。どうせ声かけるつもりだったしな。

「アツシユー恋ーお待たせー」

青髪の女はこっちに向かって走ってきた。

阿修羅とメシルそして恋……この世界でランカーと呼ばれる3人は一つのテーブルに集まったのである。

## 結成！（前書き）

全話少し手直ししました。投稿はスローペースですがよろしく願います。

結成！

「……で、一応聞くが何のために恋を呼んだんだ？」  
阿修羅は念のためメシルに聞く。

「そ・れ・よ・り・も約束のものは？」  
阿修羅の質問を一蹴しメシルは右手を前に差し出して青石を要求した。

「ああもってきたよ。」

阿修羅は文句を言いながらもアイテムウィンドウから青石を出し、メシルの差し出した手に乗せた。

するとメシルは満足そうな顔をして退席する。

「おい。どこいくんだ？」  
もちろん阿修羅が黙ってるわけがない。

「合成よ合成。先にいつっておくわ。あと……」

「ん？」

「約束は守るわよ。それと恋も誘ってあげて。ギルドのこといったら入りたたって聞かないの。」

そういつてメシルは酒場を出て行った。

「恋。」

「んにゃ?」

恋はいつの間にかピザを食べていた。

・・・やけに静かだと思ったら・・・

「お前もはいるよな。」

阿修羅は半ば呆れながら聞く。

「モチツ!」

恋は親指を突き出して元気よく答えた。

「よし。これで頭数は揃ったな。」

ギルドの作成には最低でも初期メンバー三名が必要である。つまり

現時点で一応条件はそろっている。

あとは・・・

「クエストか・・・。」

「クエストまだおわってなかったの??」

どつちやら声にでていたらしい。

「ああゴブリンの翡翠までは終わらせたんだけどね。まだ最後の一個が残ってる。」

「ふーん。とつとと終わらせてきちゃえ!!」

はあー

「そもいかないんだよ。だって最後のクエストはタナトスアリア

の討伐だからね。」

「タナトスアリア・・・」

このゲームの題名にもなっているタナトス。「タナトスアリア」はそれが弱体化している敵でいいってもいい。推奨LVはおそらく100LV。つまり現時点では誰もソロでの討伐は不可能ということだ。かつて60LV（シックスティオーバー）が5PTつまり30人という大人数で討伐したことがあったが「タナトスアリア」討伐の問題はその強さではない。

「タナトスアリア」は補助さえ揃っていれば60代からでもいいけれど、しかし所要時間があり、これが実にやっかいだ。所要時間は30分、タナトスアリアくらいの硬さの敵なら阿修羅でも1時間は軽くかかるだろう。

おそらくこれもこのゲーム内にギルドが極端に少ない理由である。

しかし今のメンツ。つまり前衛戦闘員にランキング2位の阿修羅、そしてランキング5位である恋。後衛にランキング4位であるメル。おそらくあと1人でもいれば余裕で討伐できるだろう。

「アリアかあはむっ」

「んー頭数はそろったけどアリアが問題だなあはむっ」

不安を抱えながらピザを食べる2名であった。

## メンバー探し（前書き）

久しぶりに見てみたら少しだけお気に入りに入れてくれている人がいたので書いてみました。どうぞ楽しんでみてください。

## メンバー探し

中央街『グラディオオス』の酒場「リランチ」そこには黒髪の男、青髪の女、そして黄色の髪をした少女がいた。

「んで。どうしようか・・・」  
黒髪の男はつぶやく。

「その辺から引っ張ってくるってわけにも行かないよねー。」  
青髪の女はため息をつきながらいう。

「もぐもぐ・・・もぐもぐ・・・うん・・・もぐもぐ」  
黄色の髪の少女は・・・ピザを食べている。

「だれか身内に入ってくれそうな人いないのか？」  
黒髪の男は提案する。

「んー．．．あッ！あの子なら！」

「ん。メシル、心当たりあるのか？」

「んー。」

メシルは顎に手を当てて唸っている。

「なにか問題あるのか？」

「．．．モグモグ．．．モグモグ．．．」

「んーあの子はちょっと問題があるのよねー。ほらあの巫女の。」

巫女。プレイヤー名「クツキ」。二つ名「白巫女」。一時期このタナトスオンラインで話題に挙がった人物だ。かつてこのゲームであらゆるアーティファクトを牛耳っていたギルド「コントロール」の副長だった女だ。

当時明らかになっていた固有アーティファクトの数は250前後。そのうちのおよそ150は「コントロール」のギルド資産だった。ギルド資産とはそのギルドの人が借りることの出来る武器や防具、アクセサリなどである。「コントロール」が大型化した理由として考えられるのがこのギルド資産である。ギルドに入っていればアーティファクトでなくともそれなりの恩恵を受けることができる。当然入りたがる人も多くなり、「コントロール」のギルド員は一時期当時の全プレイヤーの30%まで膨れ上がった。

そして事の顛末。巫女が単体でグラディウス的大型地下ダンジョン「クメルフォス」の攻略に行っていたとき、「コントロール」が急に解体された。ギルド資産である装備品などは借りていた人の所有物になった。そのとき、大型ダンジョンの攻略をしていたクツキはもちろんだ多くのアーティファクトを借りていた。その数およそ100……。明らかにおかしかった。そんなに必要ではなかったはずなのにそれだけの数を借りたというのは、周りから叩かれるには十分な理由だった。

結局事の真相は、誰もわからず、この問題も迷宮入りした。以降、クツキはギルドに入ろうとはせず、もちろんこのギルドにも誘われていない。

「ああ……。あいつか……。メシルあいつと知り合いだったのか。」

「まあね！」

「モグモグモグモグ……。モグモグ……。でもさあ。その人って大丈夫なの？モグモグ……。」  
黄色の少女はピザを食べながら問う。

「お前はまずピザ食うのをやめろ。」

「んー。そうねー。私もよくわかんないんだけど、あの件に関してはおそらく偶然ではなかったと思う。」

「ってことは故意にあれだけのアーティファクトを盗んだと？」  
黒髪の男は頼んだでいたワインを飲み干し、おかわりを頼んだ。

「そういうことになるわね。ただ妙なのは彼女、この間組んだとき、  
アーティファクト使っていないのよ。」  
青の女は答える。

「それはただあの件を気にして持ってきていないとかじゃないのか  
？」

「考えてみなさい。あとあと気がひけて使えないようなものをトッ  
ププレイヤーがほしがると思う？答えはNOよ。誰もほしがらない。  
たとえそれが1000のアーティファクトであろうとね。」

「んじゃ市場に流したとかは？単純に金目当てってことならあるん  
じゃないのか？」  
黒髪はおかわりのワインを受け取り一口飲む。

「それもないわ。だって1000のアーティファクトに関してはあの  
件らしい監視が立てられているし、それにかからず取引なんてでき  
っこないわ。つまりアーティファクトはまだ彼女が持つてる。」

「んー。よくわかんないなあ。つまりアーティファクトを故意に手

にいれ、それは単純に金目当てではなかった。あと自分で使ったためでもなかったってことか。」

黒の男は2杯目のワインを飲み干す。

「そついうことね。」

「んじゃま、会ってみようか！心当たりは？」  
黒髪の男は席を立つ。

「彼女はいつもグラディウスの地下街、パグスラトに宿を取ってるわ。」  
青髪の女も席を立つ。

「んじゃいこうか！」

「モグモグ・・・ゴックン。ちょっとまってよー！ー！！」  
黄色の髪の少女もあとを追いかけて、ここグラディウスの地下、パグスラトへ向かう。

メンバー探し（後書き）

次回投稿未定

## 白巫女（前書き）

投稿の仕方を忘れないうちにもう一回うp。

結構時間かけて書いてるのに、読了時間は3分くらいしか増えないんですねー。

ちょっと書いてる自分は面白くなってきたかも。読んではわかんないですけど。お気に入りptが増えてモチベーションあがってたり。

## 白巫女

「ふうーここか。」

黒髪のプレイヤー阿修羅がつぶやく。

「ここね。」

青髪のプレイヤーメシルが続く。

「ここなのかー。」

黄色の髪の少女も続く。

ランカー3人組は中央街グラディウスの地下街パグスラトの宿「メフィル」の前に来ていた。

「しかし・・・ここは相変わらず暗いな。」

地下街というだけあって昼間だというのみ辺りは夜のように薄暗い。少しの明かりはあるが10m向こうを肉眼で確認するのは難しい。しかしモンスターなどは気配察知のスキルや、広範囲索敵スペル「サーチ」にも引っかかるため戦闘にはそれほど支障はない。

「そうだねー。これじゃアッシュがどこにいるのかわかんないよー。」

恋は少しおどけていつてみせる。

「まあこんなとこにいたってしょうがないしさっさと入りましょ。」

「そうだな。」

そうして3人組は宿へ入る。

「ほお。外はあれだが中はさすがに明るいな。」

メフィルの中は意外に広くそれなりに高い天井には豪華なシャンデリアが備え付けられていた。

「巫女の部屋聞いてきたわよ。」

メシルは受付のNPCから白巫女「クツキ」のとっている部屋の場所を聞いてきたようだ。

「ねーねーアツシユー。このピザおいしそー。かってー。」

恋はいつの間にか食堂の前に備え付けられているメニューを見てねだってくる。

「金ならお前のほうが持つてるだろ。俺は武器のグレード上げたばっかだから今金欠なんだよ。ギルド作る金もキープしないとイケないし。」

タナトスオンラインの装備強化は武器自体に経験値をすわせ、その経験値を使って各能力を小上昇させる方法と、それぞれの装備にラウンドについているスロットに宝石。たとえば「青石」などの魔法属性付与石を入れたり「斬石」や「打石」などの斬撃や打撃属性石をいれる方法とあともう一つ。莫大なお金を消費し、その装備の能力を飛躍的に上げるグレードアップがある。このグレードには限界はないが、一回上げることにかかる金は異常に増えるため、グレー

ドアップはある意味ランカーだけでなく一般のプレイヤーにとっても1つの目標となっている。ちなみに阿修羅の愛鎌である「紅月」は今はグレード8である。ランカーの武器のたいがグレード7であるため阿修羅は少しリードしていることになる。

「わーわーアッシユがけちだー。」  
恋はその場で横になり手足をじたばたさせている。

「ほら馬鹿やってないでいくわよ。」  
メシルはそういつて二階へ向かう。それを追って阿修羅、恋と続く。

201号室。その部屋の前に今3人はいる。

「やていくわよ。」  
そういつてメシルはドアをノックする。  
コンコン。

10秒後そのドアは内側から開けられる。

「……………だれ？」  
そこにいたのは長い白髪の巫女の少女だった。

白巫女（後書き）

次回投稿未定

## 会談（前書き）

ちょっとといつもよりも長いかもです。でもこれでもまだ短いかなあ。

## 会談

阿修羅、メシル、恋の3人はクツキの部屋にいる。部屋に入っすぐクツキはご飯を作る。といってキッチンへ向かっていった。

タナトスオンラインにも料理というシステムが存在する。料理や鍛冶、合成、建築などの日常スキルは各町にあるギルドホームからスキルを買うことが出来る。もちろんそこにもLVという観念があり、料理をすればするほど、武器や防具を作れば作るほどスキルLVはあがっていく。また、スキルのLVが上がれば上がるほどより高度なものが作れるようになったり、より正確な仕事が出来るといったりする。このシステムによって町から出ずに鍛冶屋や食堂をやつてこのゲームを楽しんでいるものも多い。とくに鍛冶屋は宝石を使った武器強化には必須であるため、需要は大きい。

「.....おまたせ.....」

白髪の巫女、クツキはたくさんの皿を持ってキッチンから出てきた。

「おーおいしそうだよーアッシュー。」

黄色髪の少女、恋はクツキの持ってきた料理をまじまじと見ている。

持ってきた皿が並べられるとようやくご飯だ。

「そついえば名乗ってなかったな。俺は阿修羅。二つ名は首切り。LVは84だ。」

黒髪の男、阿修羅はクツキの作った料理を食べながら名乗る。

「．．．．．知ってる．．．．．2位の首切り．．．」

クツキは料理を食べようとミートパイに手を伸ばす。

「私は．．．知ってるわよね。まあ一応名乗っとくわ。私はメシル。2つ名は電導。LVは79よ。」

青髪の女、メシルも料理を食べながら名乗る。

「．．．．．あなたの電の魔法．．．すごかったから覚えてる．．．」  
クツキはミートパイを両手で持って食べている。

「あら。ありがとう。」  
メシルは満足そうにいう。

「私は恋。二つ名は奔雷。LVは82だよ。それにしてもおいしいねー。バクバク」  
恋は食べる手も止めずに名乗る。

「．．．．．ありがとう．．．．．あなたも有名．．．ダガーランカー．．．」  
クツキはミートパイを食べながらいう。

「それにしても恋たべすぎよ。なくなっちゃっじゃない。」

メシルはあきれながらいう。

「だってほんとにおいしいーんだもん。」

恋は少しふくれ面になっていう。

「大丈夫．．．まだあるから．．．．．」

そういつてクツキはキッチンから料理を持ってくる。

「わーいわーい。」

恋は大喜びしている。

「すごい量作ったんだな。」

阿修羅は驚く。

「保存がきくから．．．．．」

タナトスオンラインで作った料理は劣化をすることはない。冷えたりはするが暖めなおせば元通りの料理になる。よって持ち運び可能なパンなどの料理はよくダンジョンにも持ち込まれている。ただ腐食MAPや毒ガスMAPに入った場合、料理は全滅する。

「本題に入ろう。」  
全員が食べ終わると阿修羅が話を切り出す。

「俺たちはこれからギルドを作る予定だ。」  
ギルドという言葉聞いてクツキは顔をしかめる。

「白巫女の件についてはよく知っている。よく知った上でタナトスアリアの討伐を手伝ってほしい。」

「．．．そのメンバーなら私がいなくなたって．．．」  
クツキは顔を落としてつぶやく。

「どうにかなるかもしれない。でも確実じゃない。だからといってそこらにいるプレイヤーを連れて行っても足手まといにしかならないかもしれない。だから白巫女に手伝ってほしいんだ。」  
そういつて阿修羅は頼み込む。

「．．．あの件．．．私がアーティファクトを盗んだのは本当よ．．．」  
クツキは顔を落としたままいう。

「あの日のことはなしてくれないかしら？」  
メシルは微笑んでいう。

「わかった。」

クツキは顔を上げる。その目には涙がたまっていた。

「．．．あの日．．．ログインしたらクリスがいてギルドの解体のことを知った．．．コントロールには多くのアーティファクトがギルド資産として残っていた．．．ギルドが解体されるとギルド資産としてギルドに残されているアイテムはすべて消滅する．．．がんばって集めたものがすべてなくなってしまふ．．．それが耐えられなかった．．．考えてダンジョンに行くことに決めた．．．ダンジョンに行くことを理由にギルドに残っていたアーティファクトをすべて借りた．．．あとはダンジョンにこもって解体を待ったの．．．

クツキは涙籠りながらはなす。

「．．．アーティファクトはあとで市場に流そうとした．．．でも市場に行くで見張りがたくさんいた．．．もうその日のうちに町に出られなくなった．．．それ以来このパグスラトかダンジョン以外の場所にいったない．．．」

クツキはそう言って金庫からカードの束を出す。

「．．．これらはあの件以降使っていない．．．私1人で使ったらいけない気がして．．．」

そういつてカードを阿修羅に渡す。

「．．．よかったら好きなものを持ってって．．．これらがあれば私がいなくても．．．」

「だめだ！」

阿修羅はクツキの言葉を一掃する。

「わあ！アツシュ？」  
恋が大きな声に驚く

「気が変わった。噂でギルドに入ることには抵抗があることは聞いていた。無理に入れる気はなかった。でも会って話してみても前はただ怯えているようにしか思えない。もしギルドに入ったらそのギルドが潰されるんじゃないかな。違うか？」

「.....」

クツキは黙ったまま俯いている。

「べつに話を聞いて同情したわけじゃない。ただお前ならこれから作るギルドに入るにふさわしいと思ったただけだ。それにお前を含めても全員ランカーのギルドだ。そう簡単には潰れねえよ。」

「.....いいの?.....」

クツキは顔を上げる。

「さっきからそういつてる。それにそれが目的で来たわけだしな。」  
阿修羅は手を差し出す。

「よろしくな。」

「.....よろしく.....」

そういつて2人は握手を交わした。

## 会談（後書き）

ご意見ご感想、あと誤字脱字の指摘もお願いします。

また町、ダンジョンの名前やアーティファクトの名前、効果、種類など募集中です。

## 閑話 1 (前書き)

閑話は現実話リアルとなります。試してやってみたので見てみてください。  
閑話はすぐに終了すると思います。

## 閑話 1

「ふう。あつい。」

もうじき冬だというのに真夏のような暑さを感じた。

俺は篠草光<sup>しのくさひかる</sup>、職業は大学生だ。大学生といっても週に2日だけしかいっていない。だがサボっているというわけではない。俺の入っている学部は「VRMMO科」というとりあえずVRMMOやつとけつていうなぞの学部であり、そのとおりにやっている。

噂ではここ「永洸大学」の学長が異常なVRMMO好きということからこの学部が出来たらしい。しかしただやっただけでは大学の教育として成り立たない。週に2日は必ず大学にいき簡単なレポートを書かなければならない。まあレポート言ってもたいしたことではないし、もうすでにVRMMOで生計を立てている人もこのVRMMO科にも大勢いる。

VRMMOには2種類あり、一つはゲーム通貨が現実では使えないMMO、俗に言う「<sup>クラッシュク</sup>CMMO」そして現実でも使えるゲーム通貨、メルキルを使うMMO、「<sup>ニュー</sup>NMMO」がある名前のとおりメルキルを使うMMOが今では一般的になっている。

「さてと、大学に行くか。」

時計の針はもうすぐ10時を指すところだった。

「おーすずしー。」

今までいた建物「ヴェルメル」見る。この施設はVRMMOをやるために必要な施設が整っていて今もそろそろとVRMMO科の人が出てきている。

「っお。光じゃねえか。」

ヴェルメルから出てきたショートカットの女が話しかけてきた。

「ああ霧島か。」

こいつは霧島葵きりしまあおい俺と同じVRMMO科の生徒だ。前から話を聞いているとどうやら俺と同じくタナトスオンラインをやっているらしい。

VRMMO科では情報交換は行われているが、自分のキャラを明かすことは強制されていない。もちろんなかには公表している人もいるが、大半の人は自分のキャラを明かしていない。もちろん俺も葵も自分のキャラを明かしていない。

「おいおいテンションひつくいなあ。それに葵って呼べって言うてるだろ。そんな坊やはこうしてやる！」

そういつて葵は俺の腕を取り上げて自分の体に密着させる。

「はあー。腕を放せ。」

ボーイッシュな性格とは裏腹に葵の豊満な胸に腕を擦り付けられる。だがVRMMOでもそういつたことをしてくるやつがいるためそこまで反応はしない。

「ちえーこつちも最近つまんねえなあー。」

そして俺と葵は大学へ向かう。

「おいおいお前らなかいいなあ。」

そういつて話しかけてきたのは、身長が185cmの男、黒上灯夜くろかみとうやである。俺は170cmくらいしかないと間近に来ると見上げる

感じになる。

「灯夜か。」

こいつもVRMMO科の生徒である。やっているゲームはタナトスと並んで人気タイトルのクレルオンラインである。

「おいおい反応薄いなあ。」

灯夜はややあきれながら言う。

「さつきもこいつに同じようなことを言われたなあ。」

本当のところVRMMOをやった後の数分はいつもそつだ。向こうの世界のできごとがしばらくあたまからはなれずに反応が薄くなってしまう。

「そんなことより急ごうぜ。情報交換の時間がなくなっちまう。」  
大学のレポートの時間が始まる前に各MMOのメンバー同士で情報交換が行われる。

「っおそんな時間が急ごうぜ！」

灯夜はそついうとそそくさと歩いていく。

それに続いて2人も大学へ向かうのであった。

## 閑話1（後書き）

誤字脱字の報告とご意見ご感想は常時募集中です。  
できれば武器の能力やアーティファクトの名前能力も募集します。

## 閑話2（前書き）

これにて閑話終了です。思いつきで書いてみたらあまり思いつかず  
に焦ってしまった。

## 閑話 2

「よおーす。」

そういつて灯夜は教室に入っていく。それに続いて俺と葵も入る。

教室の中では幾つかのグループに分かれて談話している。灯夜は教室を入れて正面の窓側のグループに向かった。俺と葵は教室入って左のグループのところに入った。

「おい知ってるか。『首切り』がギルドを作るらしいぜ。」

そう同じタナトスオンラインのプレイヤー東条春樹とうじょうはるきは真っ先に言うてくる。

ここはプレイヤー同士の情報交換をする場所だ。

「へーあの首切りがねえー。」

俺は適当に返事をする。

「リアクション薄いなあ。あの首切りがギルド作るんだぜ。きつととんでもないギルドになるぜ。あの人脈は異常だからなあ。」

そういつて春樹は興奮気味にいつてくる。

「ははは、3回目だぞ光。」

そう葵は俺の背中を叩きからかってくる。

「ん？それは何だ？」

葵の言葉をスルーし春樹の持つてる紙に目をやる。

「ん？見るか。過去のレポートだけだな。」

そういつて蓮からレポートを受け取り読む。

『首切り』阿修羅。タナトスオンラインでランキング2位の男。ギルド未所属。身長は170ほどで黒いローブを常に羽織っている。武器は大鎌固有アーティファクト「紅月」（あかつき）。その湾曲した刃は赤く黒ずんでいる。取っ手の部分には布が巻かれている。また取っ手の先端に水晶がはめ込まれている。その大鎌を背中に背負っている姿を始めてみたものは決まってこういう。「気味が悪い」と。

しかしその人脈には目を見張るものがあり、ほとんどのランカーや、最高の鍛冶プレイヤーと呼ばれている『名匠』クロムや大型ギルド「サウザンド」のギルド長『雷導』神楽など名の知られているプレイヤーとパイプを持っている。

戦闘スタイルは近接攻撃が主軸。遠距離攻撃もそれなりにこなせる。おそらくまだ隠し玉をもっていそうだ。

「これはすごいな。」  
そういつてレポートを春樹に返す。

お世辞ではない。それこそそれなりに調べないと阿修羅の人脈は調べられないだろう。すこしは気になったが本気で調べればわからない情報はかかれていない。

「だろ。これ有名なプレイヤーのやつほとんどあるんだぜ。」  
そういつて春樹はレポートをぺらぺらと揺らす。

「誰のレポートなんだ？」

やはり気になるものは気になる。それもランカー全員を調べるなんて兵は聞いたことがない。

「ああそれは私のだ。」

そういつて春樹からレポートを奪ったのは葵だった。

「ああ霧島のか。ランカーと知り合いなのか？」  
とりあえず推測で聞いてみる。

「まあな。実際話したことがあるランカーはそんなにいないけどな。」

そういつて葵はレポートを持って机へ向かう。

同時に時計が11時30分を指していることに気がついた。

「ああもう時間か。」

そういつて前の机からレポート用紙を取り席につく。

今回のレポートのタイトルは「コントロール解体について」

時間は1時レポートを書き終わり大学を出てすぐのファミレスで食事を済ませヴェルメルに向かう。

「さてと。やっとついた。」

そして店内に入り手続きを済ませまた現実リアルから離れるのであった。

## 閑話2（後書き）

ご意見ご感想募集中です。

## 作戦と方針（前書き）

今回は短めで。

8 / 13 大幅書き足しました。

## 作戦と方針

阿修羅、メシル、恋、クツキの4人はグラディウスのランチの1つの机についていた。

「はぁー落ち着かないな。」

さきほどINしたばかりの阿修羅は他の3人がランチに集まっているというメッセージを見てすぐにランチに向かった。するとそこには3人のプレイヤーが1つの机に座っており、そのほかの席についているプレイヤーはその光景を物珍しそうに見ている。阿修羅はそこにいくことに躊躇いを感じまずそこから脱却を試みたところ恋に見つかり、そこに座ることを余儀なくされたということである。

いつもの3人なら割と常連のためこう見られることはないのだが今回は違う。長らく身を潜め、ここグラディウスはもちろんのこと、そのほかの町という町に姿を見せなかった『白巫女』クツキが席に座っている。

「仕方ないわよ。今回はクツキがいるしね。」

そういつてメシルはクツキに向かって微笑む。するとクツキはどこか申し訳なさそうに微笑む。

「まあタナトスアリアの対策を練ろう。」

「そういい、阿修羅は話を変える」

「そうね。ならクツキにタナトスアリアのことを教えてもらいまし

よう。」

そうクツキに向かって言う。

「わかった．．．でも大分前のverのことだから．．．」

そういつてクツキは説明をする。

前のverのまま、つまりコントロール結成時のままの仕様ならば現メンバーでも過剰戦力だということ。

気をつけるのはタナトスアリアの体力ゲージを10%以下レベルゾーンにすると即死属性のスキル「死の息吹」を使ってくるということ。しかしそれだけなら何の問題もない。阿修羅は全身防具アーティファクト「死のローブ」、メシルと恋はそれぞれ指輪と籠手に即死無効効果を強化によって付加している。クツキに関しては二つ名「白巫女」の特性によって即死、闇属性は無効、さらに聖属性も半減となっている。

問題は「死の息吹」には即死以外に腐食属性が付加されていることである。腐食属性はプレイヤーの中では最も厄介がられている属性の1つである。理由はその効果、そして現状無効化する装備がないということである。

腐食ステートを受けると全能力が半減してしまう。さらに秒間ダメージがあり、そのダメージがじわじわと体力を奪う。そのため腐食ステートになるたびに回復役のところに戻る必要がある。

「腐食か。食らったことがないな。」

いままでギルドと無関係であった阿修羅は腐食属性を食らったことがない。現状、腐食スキルを使う敵はギルド作成のために討伐必須のタナトスアリア、そしてギルド内で行われるギルドクエストによって出現するネクロマンサーのみである。

「とりあえず近接アタッカーは阿修羅と恋、遠距離アタッカーは私、回復補助役はクツキで行きましょう。死の息吹に当たったらクツキのところへいけば問題ないわね。」

「よし。んじゃこれから作るギルドの方針を発表するか。」  
そういつて阿修羅はカードを取り出しそれをクツキに渡す。

「これは・・・」  
クツキはそのカードを見て驚く。  
そのカードには『アスクレピオスの杖』とかかれていた。

「このギルドの最初目標は、神話級の装備を集めることだ。」  
そう阿修羅は宣言した。

「阿修羅、神話級の装備揃えるってどういうことなの？」  
恋はいつもどおりピザを頼んで、おそらく阿修羅以外のメンバー全員が思っていることを聞いた。

「簡単に言い過ぎだな。クエスト『異界の導』<sup>しん</sup>の達成するのに必須なもの。それが神話級の武器というわけだ。」  
阿修羅はそういつて全員の顔を見回す。この世界の分身は現実世界<sup>アバター</sup>の姿が元になってできている。変わっているのは髪や目の色である。それにもかかわらず大人っぽく、その姿は妖艶とも言えらるるであるうメシル。メシルとは反対にまだ子供っぽさ残る顔立ちの恋。終始無表情であるが、どこかあどけなく、保護欲をそそられるクツキ。そのだれもが魅力的に見える。

分身が現実世界を元にしているもなお、個人が断定されないのは、ゲームのシステムに認識障害が組み込まれているというのは、周知の事実である。

「異界の導つて、あのWonderLandの連中が手も足もでなかつたつて言う？」

メシルは驚きながら尋ねる。しかし少しその言葉には語弊があった。

「手も足も出なかつたというよりも調と桜の攻撃以外ではダメージを与えられなかつたというわけだ。」

調と桜、ギルド：WonderLandのギルド長、副ギルド長であり、双子の姉妹というのは交友関係のあるプレイヤーはもちろん、たまにBBS情報板でも話題になったりする。その二人は神話級の武器を愛用していることとタナトスオンライン屈指のギルドであるWonderLandのトップであることで、阿修羅よりも名の知られているプレイヤーでもあった。

「．．．あの双子．．．だから神話級．．．」  
クツキはつぶやく、その声はかなり小さかつたが、クツキの声はやけに通るため全員の耳に届いた。

「そういうわけだ。神話級のクエストは手ごわいがソロクエストなら俺でもどうにかクリアできるレベルだ。」  
そういつてさきほど出した黒いカードを指に挟んでみせる。

「ということはソロクエストはもうないってこと？」  
恋は結論をいう。

「そういうことだ。神話級のソロクエストは今現状受注できる4つはすべて完遂されている。ただPTクエストはまだ1つも完遂されていないからそこを狙っていこうと思う。」

PTクエストとは6人以下のメンバーでPTを組み、特殊マップで行うクエストである。特殊マップはダンジョンのようなものがい一般的だ。そこはPTクエストというだけあって、大型モンスターの巣窟となっている。

大型モンスターとはプレイヤーがモンスターを勝手に分類したものの一番上のカテゴリであり。小型、中型、大型の順に巨大になり、討伐難易度は比べ物にならないほど高くなる。小型や中型ならばソロでの討伐が一般的であるが大型モンスターの場合はソロの討伐はそうとうのLV差がなければデッド判定を受けることになってしまう。

このゲームにおけるデッド判定によるペナルティはアイテムのランダムドロップと、装備の耐久度の大幅低下であるため、耐久度が低下している状態でデッド判定を受け、装備品ロストなんてことはプレイヤー誰も体験したことのあることであろう。

「ふーん。まあいいわ。このメンバーならどうにかなるかもね。」  
そのメシルの言葉で阿修羅は自分の提案が受け入れられたことを確信しやや安心したのであった。

## 作戦と方針（後書き）

二つ名（取得者）能力

首切り（阿修羅）モンスター、プレイヤー関係なく首への攻撃とダメージ+200〜400パーセント

奔雷（恋）雷属性付加攻撃時ダメージ+50パーセント。常時スピード付加+50パーセント。雷属性被ダメージ-50パーセント

電導<sup>メシル</sup>雷属性魔法のみ使用可能。雷属性魔法与ダメージ+100パーセント。詠唱-50パーセント。雷属性被ダメージ-50パーセント

白巫女<sup>クツキ</sup>即死、闇属性無効、聖属性被ダメージ-50パーセント。

## 設立（前書き）

どうしてこうなった。

## 設立

2つの黒い影はタナトスアリアの亡骸の前に佇み4人のほうを見るように立っている。

「バグか？」

阿修羅はふとおもったことを口に出していた。

「それはないわ。こんなに完成されたバグはないでしょう。」

阿修羅も本気で言ったわけではないがメシルの言葉によりバグの線はないと確信する。

「んじゃイベント戦ってことか。」

そういつて阿修羅は身構える。それと同時に恋も2つの影に注意を払いながら戦闘の準備をする。クツキも補助をつぎつぎとかけていく。

あな がマ タ で か？

阿修羅の耳に2つの声が混ざり合ったような声が聞こえた。いや聞こえたというよりは頭に直接響いた感じだった。ふと他のメンバーを見る。戦闘の準備をしていることからプライベートチャットだと判断し、誰からか知るために反射的にチャット欄を確認する。するとそこには何も記載されていなかった。気のせいかと思い2つの影を確認する。すると影が小さくなっているのに気がつく。

最大4mほどまで膨れ上がっていたその影は半分の2mほどまで小

さくなっていた。

貴方がマスターですか？

不鮮明だった先ほどの声。今回ははっきりと聞こえた。もう一度チャット欄を確認するがやはりそこは空白だった。

そうやっているうちに補助も掛け終わりメシルとクツキは攻撃スペルの詠唱を始めている。阿修羅は2つの影に目を向ける。

「ちよつと待て。」

阿修羅は詠唱中の2人に言う。詠唱中の2人の足元にあつた青と白の魔方陣が消える。

「えーどうしたのー？」

その言葉に疑問を持った恋は阿修羅に言う。

「あれを見る。」

そういつて阿修羅は前方を指差す。すると先ほどまでただの黒い影だったものは150cmほどの人のシルエットになっていた。相変わらず大鎌を持っていたがそれも2mほどになっていた。

ずっと見ていると右側の影が白く発光しはじめる。それとは反対に左の影は黒く闇に染まっていく。それと同時にフィールド全体が闇と光に包まれる。

「っ！」

4人は反射的に目をつぶる。

そして目を開いたときに見たものは2mもの身に似合わない大鎌をもつ2人の少女だった。

「プレイヤー名阿修羅をマスター設定しました。」

2人の少女は阿修羅のほうを見てそう言う。

その言葉にメシル、恋、クツキは阿修羅に目をやる。

「え？まじかよ・・・」

わけのわからない展開についていけず阿修羅は放心する。

それから1時間後、タナトスアリアの亡骸からタナトスアリアの心臓を抜き取り、神殿を脱出した4人・・・もとい6人は半ば拠点と化しているグラディウスのリランチに来ていた。

「んで、メルとリルはAIだと？」

阿修羅は帰るときに聞いたことを信じられずもういちど2人の少女に確認を取る。

「「そうです。私たちはAIです。」」

黒髪の長い髪を持ち、白いドレスと大鎌を持つ少女メルとそれと対になるように白髪の黒いドレスと大釜を持つ少女リルは答える。

ちなみに名前は阿修羅が半ば放心状態でつけた名前である。

「んーAIの守護獣ねーしかも人型でしゃべるなんて聞いたこともないわ。」

守護獣とはスキルであるタイミングで仲間にしたモンスターの総称である。しかしタイミングで仲間に来る通常モンスターの強さはたいしたことがないため一般的にはネタスキルとされている。しか

しテイミングを究極まで極めたプレイヤーはボス級のモンスターまで守護獣に出来るためLVが低いうちは戦力にならない守護獣使いもLV60くらいからはダンジョン探索やボス討伐でも戦力となっている。

「厳密には守護獣ではありませんがその認識でかまいません。」

「俺テイミングの技能LV1なんだけど・・・」

阿修羅のテイミングLVは1。1LVで仲間出来るのはせいぜい始まりの村である辺境の村付近にいるスライムくらいである。スライム以外、しかも少女2人を守護獣になんていった日には他のプレイヤーに何を言われるかわかんない。

「それならさーメルとリルをプレイヤー扱いにしちゃえば？見た目人だし。」

いままで口を閉じていた恋が提案する。しかし・・・

「それは無理・・・プレイヤーならサーチすれ・・・ば？」

そういつてクツキの顔は言い終わる前に驚きの表情に染まる。

「え・・・プレイヤー？」

その言葉に阿修羅とメシルは2人をサーチする。

すると現れたのはプレイヤー情報。黒の少女『メル』84LVと白の少女『リル』84LVというものだった。

「なんだお前らプレイヤーだったのか。」

阿修羅は半ば祈るように2人に問いかける。

「阿修羅、それは無理があるわ。LV見たでしょ。いくらしょぼい装備だったとしても84LVでランカー情報に載らないのはおかしいもの。」

ランカーは単純にLVの高さだけでは決まらない。それは2つ名であつたりステータスの高さであつたりする。しかしLVの高さが多いのウエイトを占めているのも高さである。ステータスがいくら低くてもランキング2位である阿修羅と同じLVでランキングに載っていないのはおかしいのである。

「これは恋の言うとおりプレイヤー扱いするしかないかな。」

「それはダメです。阿修羅様は私たちのマスターですので。」  
「阿修羅が自分たちをプレイヤー扱いするという言葉に反応して2人の少女は阿修羅に詰め寄る。」

阿修羅は女に弱い。確かにいろいろからかわれているため、ある線では耐性はあるが2人の少女、たとえAIであっても美人に分類されるであろう少女に詰め寄られては折れるしかなかった。

「まあとりあえずイベントで取得した守護獣ってことで。」  
そういつてその話を終える。

「んじゃギルドのことだけど今から設立していくけどギルド名はどのうしようか。」

阿修羅は提案する。

「アツシュが決めればいいよー。」  
恋は即答する。

「言い出しっぺだし阿修羅が決めればいいんじゃない？」  
メシルも答える。

「私も二人に賛成・・・」  
クツキも答える。

「はあやっぱそうなるか。俺のネーミングセンスに期待すんなよ。」  
阿修羅は頭を掻きながら答える。

その日。タナトスオンラインの掲示板にはある情報が流れる。  
ランカー4人+2人のギルドが出来た。その名前は「モノトーン」  
と。

## 設立（後書き）

これで序章は終わりになると思います。たぶん・・・

閑話3 (前書き)

んーどうなんだろうか

### 閑話 3

「おい知ってるか？阿修羅が召還獣を手に入れたってさ。」

大学の一角、そこにはVRMMOのプレイヤーたちが雑談をしていた。教室を入って左、そこがタナトスオンラインの雑談の場所であった。昨日のことだというのにさすがはVRMMO科の生徒、情報収集に抜かりはない。阿修羅のギルド『モントーン』は設立した瞬間に公式に掲示板が立ち上がり、情報通でないプレイヤーにもその日のうちに知られた。前々から噂されていたことであるため、その話題はすぐに終わった。

そこで次に話題になったのはギルド設立時、阿修羅の後ろに控えていた2人の少女のことだ。黒のローブに赤い大鎌を持つ阿修羅の後ろにモントーンのように色のない少女、しかも身に似合わぬ2mもの大鎌を持つ少女が2人ともなればさぞかし目立ったことであろう。多くの人はプレイヤーかと思いきやサーチをするとそこに記されたのはLV84というプレイヤーではないことを記す証拠であった。しかしその形が人であること、さらに2つ名を持つていることから召喚獣であることを疑う人があとをたたなかつたが、結局未開のクエストの報酬ということで掲示板は落ち着いた。

「知ってる知ってる。でもあれってプレイヤーじゃないの？女の子だし。2つ名あったし。」

モンスターで2つ名を持つものはいないため、2つ名を持っているのはプレイヤーのみというのがタナトスオンラインの常識となっているためその疑問は何らおかしくない。

「俺も見ただけさ、LVが阿修羅と同じだったから召喚獣じゃねえ

の??どう思っひかるつ??光」  
するとなぜか俺に話が回ってきた。知らないとはいえ自分のことを話されていると思うと結構恥ずかしいものだ。

「何で俺にふるんだよ?」

恥ずかしさをごまかすようにおれはそう答える。

「だってさーお前自分の情報まったく話さないじゃん。みんなLVくらいは話してるのにさ。」

LVはいちおう50LVくらいというふうに通している。80LV代なんていった日には人物特定もいいとこだ。めんどくさいことの上ない。

「だからいつてるだろ50くらいだって。」  
いつものようにごまかす。

「それダウトー。」  
すると葵が急に話しに入ってくる。いままでごうごまかしてきたことあつてさすがにはつきり嘘だといわれると動揺する。

「なんでそうなる...」  
額に汗をが垂れる。

「だってあんたクロードプレイヤーでしょ?阿修羅ほどは行かなくても70LVはいつてもいいでしょ。正直に話せばいいのに嘘見ると有名プレイヤーかな。」

当たりだ。つい最近のことを思い出しそのときの自分を殴りたくなる。最近大学へ行くときはたいてい葵と一緒に。そのときはログアウトしたばっかということではおーっとしてるうちについ口を滑ら

せて自分がクローズドテストのときからやっているといってしまったのだ。そのときに葵も同じクローズドプレイヤーだと知ったのだが……

「それなら霧島もだろ。そういうお前も話してないじゃないか。」  
「とりあえず自分のことは棚に上げて、小さな反撃に出る。」

「ん？私？もちろん70LV代だけど？」

「なんてことだ。こんなにあっさり認めるとは思ってたため半ば呆れる。」

「おいまじかよ。70LV代のプレイヤーなんて名の知れてるやつしかいないぞ。つてか光と葵って全国で20個しか当選枠がなかったクローズドプレイヤーかよ。まじで二人ともなんなんだよ。」  
「そうクローズドテストの応募は少数先鋭という方針の下行われたため、MMO経験や一日のプレイ時間など細かい質問に答えることによって厳しい選考が行われた。そのためクローズドプレイヤーはクローズドテストの報酬として、クローズドのデータをそのまま引き継いでいる。」

「はあー詮索はなしって前きめただろ。それよりも次のアップデートファイル更新されたって？」  
「とりあえず入学時に決めたルールを引っ張り出し本題に移らせる。」

「あーそうだった。これが資料だ。こりゃいろいろと変わるぜ。」

タナトスオンラインVer1.82

新2つ名を150種類追加しました。

新アーティファクトを20種類追加しました。

新MAP極東の砂漠『グラスナダ（推奨LV75）』、オアシス都市『アクロポリス』、砂漠地下遺跡『カタコンベ（推奨80）』を実装しました。

新システム職業を実装しました。

職業に就くことでそれぞれにあったパラメータに補正が入ります。また職業の種類は次のようになっています。基本ジョブへの転職はグラティウスの転職棟にて転職可能です。

ファーストジョブ（10LV）

ナイト マジシャン スカウター

レンジャー テイマーズ

技術者 鍛冶屋 商業者 料理人

セカンドジョブ（50LV）

ナイト派生

バーサーカー キーパー

マジシャン派生

メイジ クレリック

スカウター派生

アサルター

レンジャー派生

ワイルドハンター

テイマーズ派生

マスターテイマーズ

サードジョブ（80LV）

Coming Soon . . .

戦闘職にはこれらのほかにシークレットジョブ、ユニークジョブも実装します。

#### シークレットジョブ

クエストをすることにより転職可能になるジョブ。基本ジョブよりも能力値は高いですが転職する場合、ジョブスキルのみしか使えなくなります。

#### ユニークジョブ

2つ名やユニーククエストなどの条件を満たすことにより転職が可能になります。能力値の補正は職によって違いがあります。また職1つにつき1プレイヤーとなります。ユニーククエストの受注は1つにつき1人のみです。プレイヤー受注中は他プレイヤーの受注は不可能となります。なおユニーククエストにはそれぞれ期限があり、達成できなかった場合ペナルティーを負いますので注意してください。

サイドジョブに関しましては次回アップデートでの実装となります。なお転職LVを超過している場合でも転職は可能となっています。職業スキルはメルキルやEXPを消費することで取得できます。

「んー職業かー。まああって困ることないけどねー。これいつ実装

だっけ？」

いままで職業がなかっただけあってこのアップデートはかなり大きい。今でさえすべての2つ名が明らかになっていないため、職業にも隠し要素が多くありそうだ。それにメルとリルのこともある。プレイヤーでも召喚獣でもない彼女らが何なのかも気になるところである。

「たしか来週の金曜だな。その日1日はサーバーも停止してるからINはできないな。」

さきほどから情報報告をしているのは黒木螢<sup>くろぎけい</sup>。VRMMO科タナトスプレイヤーの情報通つてところだ。身長は俺と同じくらいで黒縁の眼鏡を掛けている。眼鏡を外せばそこそこイケメンの気がしないでもない。アップデートの内容は言えないような方法で仕入れているらしい。ゲーム内の情報もお手の物だ。

「そうか。やっぱり気になるのはシークレットジョブとユニークジョブだよな。」

やはり隠しやら、自分だけっていうのには憧れるものである。

「ん？一部しか手に入らなかったが見てみるか？」

そういつて螢は俺に紙を渡す。

が、

「おい、これなんだ？」

そこにかかれてたのはわけのわからない数字の羅列だった。

「ん？シークレットジョブとユニークジョブだけど？」

螢すこし微笑みながら言う。こいつ、確信犯か。

「はあーまあいいや、どうせ来週にはわかるし。」

しかし職業か。いままではなかったがなかったからこそあった自由さがなくならないかが心配だ。いままでは職業という概念がなかったため魔法系と物理系の両方を育てたり出来ていたわけだ。それが今回の仕様変更で不可能になったりしたらそういったプレイヤーはどうなるか・・・

まあそこらへんも考えてあるだろうと結論付け今日も大学から直でヴェルメルに向かう。

Ver 1.82 (前書き)

納得いかなくて付け足して、納得いかなくて、消してを繰り返してた結果結構日にちがあいてしまいました。お気に入りが増えてうれしい限りです。

Ver 1.82アップデート。

阿修羅たち『モノトーン』の設立から1週間ほどたった。目的は神話級の武器をあつめることだったが、アップデートによる大きな変化があるためそこまで何の特別なことはしていなかった。メルとリルをいれて6人で推奨LV70のダンジョン『ドウムフォレスト』の探索をしたり、リランチで雑談をしたりしていた。

「マスターこんにちは。」

阿修羅がINするとメルとリルも同時に阿修羅の両脇に召喚される。この1週間でこの2人のことについては大体わかった。

まず戦闘力は阿修羅と同等くらいであった。ステータスもしかり、武器の性能もそれに拍車を掛けている。2人の持つ武器、大鎌『血吸』（ちすい）は攻撃した対象の体力をダメージとは別に吸収するところが出る。プレイヤーは体力が減ったら、ポジションや料理などのアイテムを使って回復するか、回復スペルで回復するのが一般的である。まれに『吸収』という効果のついた武器があるがそれはあまり当てにならないような回復量でしかない。しかしこの『血吸』はその回復量の比ではない。『ドウムフォレスト』はアップデート前のトップレベルのダンジョンであった。阿修羅たちでさえおそろく回復アイテムや回復役は必須であるそのダンジョンのなか、メルとリルは2人で狩っていた。そして結局回復を1度もしないでそのダンジョンの探索を終えた。

阿修羅は2人に武器をカード化して見せてもらつと、やはり裏が黒かった。つまりは神話級の武器であった。改めて神話級アーティファクトのでたらめさを実感した。

「ふうー。つとメッセージか、なんだろ。」  
阿修羅はINすると同時に届いていたメッセージを見る。

「「転職」クエスト：デュラハンの首？転職クエストか！」

あきらかに転職関連のクエストだったため若干興奮したがリランチで落ち合う約束をしていたことを思い出しグラディウスの町を歩く中央通りを歩いていると左に見慣れない建物が見えた。なにかと見てみるとそこには転職棟と表示されていた。転職棟には大勢のプレイヤーがいて、あるプレイヤーをサーチするとLVと2つ名、プレイヤー名、そして職業が書かれていた。

「ほおー。やっぱり表示されるのかー。」

そうやってどんな職があるのか見てみようとする多くのプレイヤーをサーチする。

「やっぱり基本ジョブの人ばかりかだなー。」

すっかり阿修羅は職業に興味津々になっていた。職業棟付近にいるプレイヤーのほとんどが基本ジョブであるナイト、レンジャー、マジシャン、アサシンであった。セカンドジョブの人もそこそこいたが圧倒的にファーストジョブのプレイヤーが多い。生産系のジョブのひとはあまりいなかったが、いかにも鍛冶屋であるう大きな槌をもった男がいた。

「っお阿修羅じゃねえか。」

そういつて大槌をもった男が近づいてくる。袖のないベストと作業用であるうズボンを着けていて筋肉質な腕はそこらへんのプレイヤーには力では負けないだろう。この男こそ二つ名『名匠』をもつ武器鍛冶屋クロムである。

「おおクロムか。職業は．．匠？。」

阿修羅がクロムをサーチすると職業の欄には『匠』と書かれていた。

「ああ。INしたらクエストがはいっててな。職業柄納品クエストだったからとつとと終わらせた。つま納品アイテムが炎刀『炎牙』（えんが）だったのには肝を抜かれたがな。」

炎牙はグラディウスの南にある火山ダンジョン『ボルケノーラ』の麓の大穴の最奥のボスモンスター『バハムート』がまれに落とす『炎竜の牙』から作られる。炎竜の牙はアーティファクトではないがしかしバハムートの討伐のしにくさとドロップ率の低さからかなりの額で取引されている。クロムはたしかにトッププレイヤーであるが、戦闘力は戦闘系のプレイヤーには遠く及ばない。そのため高LVの素材の調達は露天で済ませなければならぬ。転職するからといってすぐにそれだけの額を出すことが出来るあたりクロムの財力と手腕が伺える。

「炎牙とは大きくてたね。お前しか作れないんじゃないか？」

炎牙は鍛冶アイテムであり、敵からのドロップはない。しかもそのグレードは最高LVである。

「まあな。伊達に名匠じゃねえよ。だからこそこのクエストだったんだろつな。楽で助かったがなはっはっは。」

そういつてクロムは不豪快に笑う。特殊なジョブにつけて機嫌がいいのだろう。

「マスター、約束はよいのですか？」

クロムと話し込んでいるとメルがそういつた。

「マスター、急いだほうがよろしいかと。」

リルも言う。

「おっと、すっかり興奮してた。急ぐか。んじゃ約束があるからいくな。また武器メンテよろしくな。」

阿修羅の武器のメンテはクロムと知り合って以来クロムに任せている。クロムのメンテはさすが名匠だけあって、そこらの鍛冶屋に頼むより数倍、そのままの状態を維持できる。そのため阿修羅はその鎌1本でやっていけているわけだ。恋は自分でメンテをしているらしいが、戦闘時は電気をまとっているため劣化しにくいそうだ。

「おう。匠になったからな。次からはもっといいメンテが出来ると思うぜ。」

そうして阿修羅はすこしあせりながら2人を連れてリランチに走る。

「悪い遅くなった。」

そういつてリランチの一角の席に座る。すでに3人は席に座っていた。職を見ようとサーチしてみるとだれも転職していないようだった。

「あれ？みんな転職してないの？」  
阿修羅は尋ねる。

「はあみんなクエストしないといけないから。  
メシルは溜息をしながら答える。」

話を聞くと恋は「転職」雷獣の導き、メシルは「転職」雷導を極めしもの、クツキは「転職」天の巫女というクエストを発生させたらしい。どれも確とした手がかりはなく唯一クツキの天の巫女は、天空都市『クラウド』にあるセント＝グランツ大聖堂が怪しいという感じである。

「んー。俺もクエスト発生したから全員か。よく運営も1人1人につくるよな。」

阿修羅はめんどくさそうにつぶやく。

「みんなってわけじゃないでしょ。このギルドが異常なのよ。ちょっとね。」

そういつているとクツキが持っているものを机に出す。それはたくさんのカードであった。

「おーすごい。」  
恋は驚いてつぶやく。

「クツキこれアーティファクト？」  
阿修羅が聞くとクツキは1度だけうなずく。

「……これ……どうすればいい？」  
クツキはすこしつらそうに阿修羅に聞く。

つらいのは当たり前だ。クツキの評判はこれらのアーティファクトで悪くなったも同然だからだ。今でこそそこまで非難する人は少ないが、当時は町も歩けないほど非難の言葉を投げつけられたのだ。阿修羅もそのことを考える。このまま持っているのもありだが、それではクツキは納得しないだろう。だからといってすべてを売るのも気がひける。そこであることをひらめく。

「合成・・・合成しちやえばいいんじゃないか？」  
阿修羅は答える。

合成とは主に鍛冶屋で出来るシステムである。鍛冶屋でも武器の生産、修理、強化、そして装備品の合成が出来る。合成は武器の強化とは違い、装備同士で行う装備強化である。組合せによっては強力な装備品になったりするが、ほとんどの場合は失敗したり、仕様用途のわからないアイテムになったりする。うまくいけば2つの装備の性能が混ざったりするため、それに掛けて合成に躍起になっている半ば博打打のようなプレイヤーもいる。

「そうね。アーティファクトだしもしかしたらいいものできるかもだし。そんなあっても邪魔でしょ。」

クツキの持っているアーティファクトはたしかに今でも貴重なものだ。でもバージョンがあがり、アーティファクト1つ1つの重要度は少なくなっている。ましてや全員がトッププレイヤーであるモノクロームにはほぼ必要がなかったりする。クツキを含め、全員がそれぞれ強力なアーティファクトの装備や強化を施した装備をもっているからである。

阿修羅は賛否を確かめるためクツキを見る。

「・・・それで・・・いい。」  
クツキはいつもの無表情でそう答えた。

「さてまずはクラウドにいくか。」

アーティファクトの合成を終え、全員グラデイスの中央の光を発している魔法陣の中に集まる。アーティファクトはいくつかの換金アイテムと装備6個になった。天剣『ウインドクレイモア』という初めて見るアーティファクトを手に入れたため一応は成功といえた。クラウドへはこの魔法陣でグラディウスから直接いくことが出来る。そして次の瞬間4人はグラディウスから消えた。

Ver 1.82 (後書き)

『名匠』クロム LV70 職・匠

名匠・・・鍛冶スキルを3段階上げる。製作時間 - 70% 装備製作時低確率で特殊能力付加。

匠・・・最高位の装備製作可能になる。装備製作失敗無効。特殊能力付加率上昇。素材ドロップ率上昇。

## 空中都市の名匠（前書き）

投稿がだいぶ遅くなりました。なかなかストーリーが思い浮かばず横道に逸れてしまいました。

## 空中都市の名匠

「ふーここもいつぶりか。」

グラディウスからの転送時間はほぼ一瞬、その風景は、中世のレンガの町並みから一転、一面白い街が目に入る。天空都市『クラウド』それがこの名前である。阿修羅たちが転送されたのは町の中心。そこには広い広場になっており、人通りも多い。向かって正面には、クエストの受注所があり、グラディウスほどではないが多くのプレイヤーがたむろしていた。受注所の左右には道がのびており、そのはるか前方にはちよつとした丘の上にたつ立派な神殿が見える。その建物こそ今回の目的である『セント＝グランツ大聖堂』である。遠めに見ても存在感が圧倒的で、城にも見えるその建物には、巫女や神官のNPCがいる。この聖堂は天空竜『グローリアス』を鎮めるため建てられ、天空神『エアル』を祭っている。この世界には各地にそういった神殿や聖堂が存在している。クラウドのやや南にはまた廃墟と化した遺跡がある。空中大陸のダンジョン『セント＝ソーマ跡地』推奨LV40 が存在している。まだ阿修羅が名を馳せる前によくお世話になったダンジョンである。今では『スノーウィン』の巨大ダンジョン『雪の森』推奨LV40 が狩場としては一般的であったが当時はまだグラディウス以北の地域は実装されていなかった。しかし、今でもグラディウスから直通で来られるという交通の便のよさによって一部のプレイヤーには人気の狩場である。

「よくこのダンジョンにこもったわー。」

メシルは伸びをしながら言う。当時は親交のなかったメシルであるが、やはり阿修羅の世代のどのプレイヤーもお世話になったようだ。

阿修羅たちは久しぶりのクラウドを楽しみつつ、セント＝グランツ

大聖堂へ向かった。やyaiそうでいながらもその道中のたくさんの露天にめぼしいものがないかを確認してしまつのはトッププレイヤーの性であった。

露天に座る女『灯』（あかり）はうんざりしていた。本当であれば宿に籠っていたい気分である。しかしさすがにずっと部屋に籠って作業をしていたため、さすがに在庫が増えすぎ、素材がきれてしまったため露店を開かざる負えなくなってしまった。別に何もせずにおもてなししていてもなんの問題もないわけだが、何もせずにいると落ち着かない自分は職業病ではないかと思う。つい最近までは、そこらにいる鍛冶プレイヤーとなら変わりのないものを作り、売って生計を立てていたわけである。さすがに個人では資金が足りなくなり、ギルドへの加入の面接を何度も受けた。しかし結果は失格の連続であった。自分がお金に困っている鍛冶プレイヤーであると知るやいなや、その場で失格と知らされる。そしてソロでやっていこうと覚悟を決め、中堅のプレイヤーで一般的なミスリル装備を作っている

プレイヤー、鍛冶の子『灯』は二つ名『名匠』を手に入れました。

そんなログが全プレイヤーにながれた。名匠といえばクロムが取得していることで有名な鍛冶系の二つ名で知られている。クロムは鍛冶プレイヤーでは群を抜いた実力の持ち主であり鍛冶プレイヤーの

みならず一般プレイヤーでも知らないものがないほどの有名プレイヤーである。やや興奮が隠し切れず、にやけながら新しい力を実感しながら作ったミスリルソードは取得以前のものとは比べ物にならないほどの性能であった。それから数分後、数人のプレイヤーが灯のいる鍛冶スペースになだれ込んだ。灯はそれらのプレイヤーに見覚えがあった。ギルドの面接に行ったときに見たことのあるプレイヤーばかりだった。用事は想像通りだった。

資金提供するからギルドに入れだとか、優先的に鉱石をまわすからギルド専属の鍛冶屋になつてくれだとかそういうものであった。

もちろんすべての誘い蹴った。そして名匠を手に入れたことよって手の平をひっくり返すように態度を変えてきたギルドにあきれた。もちろん頭では理解できないわけではない。名匠を取得する以前の自分は無力であったため面接に落ちた。名匠を手に入れたから鍛冶プレイヤーとして有益と判断された。しかし頭で理解していても割り切ることが出来なかった。そして誘いを断って数日、鍛冶スペースだけでなく、露天にまでスカウトが頻繁にくるようになった。名匠を取得してからというものの顧客が大量に増え、武器の値段を上げたにもかかわらず武具が飛ぶように売れたので鍛冶セットを買い、前もって買っておいた宿の一室に設置し、武具作りに専念するようになった。

そういうわけで現在露天を開いている灯だが、露天においてあるは最高傑作というわけではない。むしろ灯の目には駄作と映るような品の数々である。しかしギルドのスカウトたちは誘いに来るたびに何本も買っていく。馬鹿ではないかと思いきやさらに駄作を補充する。駄作を露天に並べていると地面に4人、いや6人の影が映る。またスカウトかと思いきや。顔を上げる。

「スカウトはお断りだよ。とつと商品を買って帰ってくれ。」

そういつて6人の客を見る。彼女の目に映ったのは互いに名が馳せてない頃に自分の作品を好んで使っていた黒のローブを羽織った大鎌使いであった。

## 再会の告白（前書き）

なかなか進展しない。。。

## 再会の告白

「スカウトはお断りだよ。とつと商品を買って帰ってくれ。」

なにかめぼしいものはないかと露天を回り、ふと目に入った露天に入る阿修羅たちにそんな言葉が投げかけられる。気配察知は常時発動しているため少なくとも近くにプレイヤーがいないのは全員確認済みだった。つまりそれは自分たちに投げかけられたというわけだ。

その露天主はそんな言葉を投げかけ阿修羅たちを見て、固まった。

「もしかして灯か？」

阿修羅には明らかに鍛冶プレイヤーであることを表す作業着を着ていながら、燃えるような紅い長い髪、そして均整に整った顔に見覚えがあった。しかし阿修羅の知る灯とは口調や雰囲気明らかに違っていたため、つい疑問が口から出てしまった。

灯は阿修羅に気がつく、しまった。といった顔をし、すぐに顔を伏せた。その顔は真っ赤に染まっていた。

「え？あ、阿修羅？あ、あの、ひ、ひさしぶり。」

俯いた灯はややどもりながらも、『阿修羅の知っている』灯で挨拶をした。

「ああ、久しぶり灯。」

先ほどの灯からの変わりように阿修羅はやや驚きながらそれでも以

前と同じようにあいさつをした。阿修羅の周りにいた仲間というよりメシルとクツキはぼかんとした顔になっていた。トッププレイヤーのそんな顔を見られることなど早々ないだろう。恋は終始落ち着きがなく、今にでもどこかへ飛んでいきそうな勢いである。それを知ってか知らずか、メルとリルは恋の進める道を狭めるように背中に大鎌を背負っていた。

阿修羅たちは、露天を畳んだ灯を含めてセントIIグランツ大聖堂へ向かっていた。

「そついえばさっきの言葉使いどうしたんだ？」

阿修羅は先ほどから気になっていたことを聞いた。阿修羅が以前灯とあったときは明らかに違う言葉使いだったからだ。さらに明らかに客を敵と思わせる態度もだ。以前の彼女は客が来て喜ぶことはあれど、嫌がるようなことはなかったからだ。

「あれは、こ、この言葉使いじゃ、きゃ、客に足元みられるから。」

この言葉使いが彼女の素である。阿修羅が今の愛鎌である『紅月』（あかつき）を手に入れるまで、彼女の作品のミスリルソードを使っていた。当時はあまり武器にこだわりはなかったが、あるとき露天で男プレイヤー数人に囲まれ、いちやもんをつけられていた彼女を助けたのがきっかけであった。灯はひどく後ろ向きな正確なので仕方がないことではあったのだがやはり一人のプレイヤーとして見過ごせなかったというわけである。当時はそこらへんのプレイヤーとなんらかわりはなかった阿修羅だったが、LVは男たちより上回

つていたため難なく追い払うことが出来た。そのお礼としてもらったのがミスリルソードであった。NPCが販売しているものより格段にいい性能だったため、NPC以外から武器を買ったことのなかった阿修羅はそれを愛用し、武器や防具の耐久度が下がるたび灯のところへ通っていた。

「鍛冶職もたいへんだな。うおっと。」

「アツシュこの人とどういう関係？」

さつきからあちこちを見ていた恋がいきなり阿修羅の背中に飛び掛ってきた。

「ん？前にお世話になってた鍛冶職の人だよ。」

「今はブラックスミスだけだ。」

灯はなぜか同じ意味の言葉を続けた。ブラックスミスが鍛冶職というのはあまり英語に詳しくなくともわかることである。そう思い阿修羅は灯にサーチを行う。

『名匠』灯 70LV ブラックスミス

「ブラックスミスは職業か。しかも2人目の名匠は灯だったのか。」  
灯が名匠だということは道具屋で売っている端末からアクセスできるBBSで簡単に知ることが出来たが阿修羅はもっぱら狩りに励んでいたためそこらへんの情報にはめっぼう弱かった。

「．．．知らなかったなんて．．．びっくり。」

クツキは阿修羅の横に来てニヤリと微笑みながら言った。

ずっと地下から出てこなかったクツキに負けた感じがして阿修羅はなんとなく落ち込む。

「でもこの職、ちょっと特殊でたいへん。」  
そんな阿修羅をほらっっておきながら灯はつぶやく。

「ん？特殊？」  
阿修羅はすぐさま復活して尋ねる。

「うん。」  
そう短くうなずくと同時に灯の足元に魔法陣が浮かぶ。町では戦闘用スキルを発動してプレイヤーに当たっても透過するため、とくに問題のない行動だった。

「ソードスミス！」  
灯が詠唱を終えそう唱えると、灯の手には業物であろう蒼い線の走った長剣が握られていた。

「これは？」  
すべてを見ていたメシルは驚きながら尋ねる。他のメンバーも目を丸くしていた。すくなくとも鍛冶スキルでの武器生成とは圧倒的に違っていた。なんとといっても一番の違いは魔法陣を使ったことだった。

「これがユニークジョブ、ソードスミスのスキル。これは簡単に碎ける。」  
そういつて生成した長剣を地面に立てると、その長剣は蒼い粒子になった。それを見て灯は俯く。

「ソードスミスは鍛冶職兼戦闘職なの。」  
「そう言うと同時に大きな音を立て、灯の前方に巨大な一本の剣の刃が地面から生えた。」

## 争奪戦（前書き）

受験生なのに何をしているんだか・・・

## 争奪戦

「はあー。どうしてこうなるかなー。」

阿修羅は大きいため息をつく。ここはクラウドの闘技場。場所をいうならば露天が並んだ道の先である。阿修羅はその闘技場に立っており阿修羅の10mほど後ろにはメシル、恋、灯、メルとリルが立っていた。そして阿修羅の前方には大剣を持った血の気の多そうな大男が立っていた。その体格はがっしりとして身長は2mくらいはあるのではないだろうか。そして特に鍛冶に知識のない阿修羅から見ても鈍らと映るその大剣ではあるが大男は自信十分といった様子である。といっても大男のLVは67。中堅よりやや高い程度であった。

「阿修羅さんよー。その2つ名頂いてくぜーへへっ。」  
大男の名前はグラツ。まったく聞いたこともないため因縁があるというわけではなかった。

これは2つ名争奪戦これは2つ名を掛けた決闘である。仕掛けた側は勝てば相手の2つ名をもらえるが、負ければ全財産の半分をランダムで相手に譲渡されることになるといった決闘である。財産といったものはこのゲームでは曖昧なもので人に預けている金やアイテムは含まれないそのため、多くの対戦者がランカーに押しかけることもあると思うがそれはない。2つ名争奪戦が可能になるのは前回の争奪戦が行われてから3ヶ月後となっているため、連戦などはないのである。

とはいっても阿修羅が争奪戦を申し込まれたのは1年ほど前のことであり、今更といった感じである。そのLVをみてさらに拍子抜け

ていた。

「あー。それはいいから。早く始めるぞ。急いでるんだ。」  
阿修羅はやや挑発気味にいった。

「つち。お高くとまりやがって、この成り上がりが！」  
案の定グラツは大剣を振りかぶりながら突っ込んできた。大剣スキル『ラッシュ』。対敵、プレイヤーともによく使われたスキルである。速度、威力ともに申し分ないが最近ではモンスターへの切り込み用スキルと化している。理由は簡単で、あまりに使い安すぎたのだ。そのため多く見られ、広く知られてしまった。阿修羅もソロプレイヤーではあったが、大剣を使っていた時期もあったため簡単に対処しようとグラツの振るう大剣の剣先を『紅月』でそらす。

「っへ！そんな対処じゃとまらねえよ。」  
そらされた大剣はそのまま払われることなくそのまま別のスキルへ移行する。剣類スキル『カットイン』。紅月と接触している大剣に大きな力がかかる。阿修羅は押されていた。

おかしい。たとえどんな装備をしていたとしても押されることなどありえなかった。相手とのLV差は17。この17LVの差は大きい。本来ならラッシュを払い、カットインも弾き、スキルも使わないう一般攻撃で決まっていたはずである。少なくともバージョンアップ前は

ここで阿修羅は気付く、彼にあつて自分にはないであろうものを。

「職業・・・カッ！」  
そういつてカットインを弾き飛ばす。

「っは！ようやく気付いたか！俺はバーサーカーだ。力で職業を持たないお前には負けねえよ。」  
そういつて再びラツシュを放つ。

「はあー。そうか。」

しかし阿修羅には先ほどの焦りはなくラツシュをしてくるグラツに紅月を振るう。しかしグラツのラツシュによって簡単に弾かれ、そのままグラツは阿修羅の懐へ入る。

「っへ。所詮ランキング2位もこの程度か！」

そういつてグラツはカットインを放つ。この間合いで阿修羅がそれを避ける術はなかった。阿修羅は笑っていた。

「久しぶりに楽しめたよ。」

阿修羅はそう言い放つとカットインを放つグラツの後ろに立つ。走術『アーク』瞬間的に相手の後ろに回るスキルである。

「なにッ！！」

グラツはその声に反応して声を上げる。

しかしグラツが振り向く前に一閃、阿修羅の攻撃が加えられる。グラツのHPバーが一気に50%ほどまで削れる。

「くっそっ！」

グラツは振り返り大きく振りかぶる。大剣スキル『スラツシュ』。しかしモーシヨンの途中で阿修羅はグラツの腹に蹴りを入れる。

「ぐっはっ！」

グラツの巨体はあっさり4 mほど吹き飛ぶ。武術『飛天』（ひてん）ダメージはそれほどでもないが早さとノックバック性能に富んだこのスキルだがほとんどのプレイヤーはダメージの低い武術スキルをとっていないためかなりマイナーなスキルである。

「終わりだ。」

阿修羅は大きく振りかぶり4 mほど離れているグラツに向けて紅い一閃を放った。紅月スキル『紅花』（べにばな）。紅い一閃を放つ中距離戦闘スキルである。一部のアーティファクトについている特殊なスキルである。その強さ故にアーティファクトを手にいれ、ランカーになったものを一部のプレイヤーはこういう「成り上がり」と。

グラツはとっさに防御姿勢をとったが、ジリジリとHPバーは減り、最後には防御姿勢も崩れ、1年ぶりの『首切り』争奪戦は幕を閉じた。

「それにしてもやっぱりアツシユはすごいねー。」  
阿修羅たちは争奪戦を終え闘技場を後にする。少し離れたところには多くの野次達が阿修羅たちを見ていた。

「やっぱりさすがだと思っわ。技能の違うスキルを使いこなしてて。」

「メシルは珍しく阿修羅に感心していた。あれほど焦った阿修羅もか」

なり久しぶりであったが、その状態でも相手を分析し、答えにたどり着いたのは見事だった。戦闘技能の違うスキルを使いこなすのもかなりの戦闘をこなしていないとできないことである。本来プレイヤーは1つの技能で戦うことが普通である。そもそも多技能修めているプレイヤーも稀なのである。技能をとるのにも金やクエストを行わなければならないため、それよりも狩りをしていたほうが強くなれるというのが一般的に言われていることである。メシルも魔法の電属性のみに特化している。それゆえの『電導』であるのでどちらがいいとは言えないのである。今回阿修羅が使った走術なんかはそもそも移動にも使えない短距離的なものであるため好まれず、武術は決定的に火力が足りない。そういった具合にあまり使われていない技能も多くある。

「阿修羅強くなったんだね。あの時も強かったけど。」  
灯はなぜか顔を赤らめながらそう言う。

「まああのときはLVだけって感じだったからね。今は成り上がりだけだな。」

阿修羅は愛鎌を片手で持ち、鼻で笑ってそう言う。

「それにしても早く転職したほうがよろしいかと。」  
メルは突然そう言う。

「早く転職しなければ、他の方も申し込まれるかもしれません。」  
リルが続けてそう言う。

「．．．たしかに．．．めんどくさそう。」  
クツキは顔をしかめてつぶやく。仮にもここにいるメンバーは2つ名付のランカーである。しかも職業についていないためいい鴨状態になっただけだ。

「とりあえず職業に就くまでは対戦拒否にしておいたほうがよさそうだな。」

対戦拒否とは2つ名争奪戦を拒否することである。しかし、ある一定以上の対戦は拒否することが出来ないため、あまりしていても意味のないような代物だが、しないよりもましである。

そうこうしている間にセントIIグランツ大聖堂についた。

「おお。こうなっているのか。」

阿修羅はクラウドに来たことはあったがここに来るのは初めてであった。というよりもクツキ以外は全員初めてであった。阿修羅たちが入り口に立ち止まっているとクツキがセントIIグランツ大聖堂に入っていく、それに釣られて他のメンバーも大聖堂に入っていく。

## 天空の巫女（前書き）

なかなか思いつかなくてかなり日が開いてしまいました。すみません。前の投稿のときにはもうすでにこれを書き始めていて余裕だと思っていたらこのざまだよ。ほかの話も若干修正してあります。

## 天空の巫女

### セント＝グランツ大聖堂

かつて、この空中大陸クラウドの民が天空竜『グロリアス』の怒りに触れ、その怒りを鎮めるために建てられたものと云われている。阿修羅たちはその聖堂に入ってすぐのホールにいた。中は庭園のようになっており、木や噴水など、その1つ1つにもどこか神々しさを感じる。

「んー来たはいいけど巫女ってどこにいるんだ？」  
阿修羅はクツキに聞く。

「・・・こつち・・・」  
そういつてクツキはそそくさと右側の聖堂の兵士であるうNPCが塞いでいる大きな扉のほうへ歩いていく。全員それに続く。

「・・・通して・・・」  
クツキは兵士にこつつぶやく。

「ここは関係者以外立ち入りは・・・ッ!!」  
兵士はクツキを見て驚き、待つてると言い扉の奥へ消えていった。しばらく待っていると兵士は帰ってきて、扉の中へ阿修羅たち諸共入れてもらった。どうやらパーティーを組んでいたため入れられたらしい。そのまま兵士に連れられ、聖堂のさらに奥にあった先ほどの扉の倍近くある扉の前に来た。

「この先に巫女様が居られます。どうぞ中へ。」  
そういつて兵士は扉の横へ立つ。

そのまま阿修羅たちは扉を開け部屋へと入ってく。

部屋の内部はさきほどの聖堂の雰囲気とは一点壁、床が薄いピンクで統一されており、部屋には真ん中に天蓋付ベットがあるだけだった。

「あなた方を待っていました」

そう通る声を響かせたのはベッドに座りこちらを見ている巫女であった。身長はだいたい145cm前後でしゃべり方とは裏腹に幼さが見え隠れする容姿だった。その巫女服は上から下まで白で統一されているクツキとは違い。その巫女は黒であった。

「・・・なに？」

そういつた巫女にもクツキはいつもの無表情を崩さず問う。

「あなたに私の力を捧げます」

天空の巫女は両手を胸の前に組んで言う。

「・・・あなたは天空の巫女・・・力がないと困るんじゃない?・・・」

「私の力は」

そういいかけると同時に天空の巫女は力なく倒れる。

阿修羅が反応する前にクツキは簡易魔術『エア』で倒れる巫女を浮かせ衝撃を和らげる。

「こちらへ・・・こちらへ来てください」

やや余裕のない表情で巫女はクツキを呼ぶ。それを聞いてクツキは倒れている巫女のもとへ向かい膝を折る。

「私はもうもう長くありません。しかしあいにくこの巫女の力に耐えうるものがないのです。あなた以外には。どうかこの力を受け取ってもらえませんか?天空の巫女なんて職お飾り程度のものに過ぎませんが、この力はあなたの役に立つはずです」

それを聞いて納得したのかクツキは一度だけうなずく。

「ありがとう」

その言葉と共に巫女はクツキの胸に手を当て力を注いでいく。

「ッ!」

クツキの胸に当てられた手が徐々に発光していくのと同時にクツキの顔は苦痛にゆがんでいく。

徐々にクツキの体を覆っていくその光は1度クツキの全身を覆い。

そして一気にはじけた。

そこにいたのは天空の巫女と同じ巫女服を身にまとったクツキだった。

プレイヤー、白巫女『クツキ』は2つ名『天巫女』を手に入れられた。

システム音とともにこのメッセージが全プレイヤーのインフォメーションチャット欄に表示された。

そしてクツキはユニークジョブ、『祈り子』となった。

「どうか・・・あなた方に幸福があらんことを・・・」

その言葉を残し、天空の巫女は光の塵となって消えた。聖堂の外に出るときに何かイベントがあると思っていた阿修羅たちだが、特に何もなく聖堂をあとにし、天空都市『クラウド』に戻ってきていた。

クラウドに来る前にクラウドの周辺に広がる草原『ベネシス草原』で祈り子のスキルを試した。クツキは所持していたメルキルで現状覚えられるスキルをすべて取得したらしい。同時についてきていた灯も練習がてらベネシス草原のモンスターであるレッサードラゴンは体長6mほどのドラゴンとしては小型であるが、モンスターとしては大型モンスターに分類されるため、同LVや、それに近い場合はパーティーでの討伐が基本となっている。しかしレッサードラゴンのLVはだいたい40-50LV。そしてクツキのLVはドゥームフォレストで狩っていたときに74LVから75LVに上がっている。灯も今日戦闘職になったとは考えられないほど、レッサードラゴンに対して善戦していた。さすがに多少危ないときはあったが

クツキの補助や回復によってダメージはないに等しいほどであったため、ほぼHPゲージを削られずに1体、1分ほどで巨体を沈めていた。

「さて、クツキもジョブにつけたし、どうするか。」

阿修羅たちはクラウドの酒場である『メハメド』に来ていた。酒場の中は賑わっており、テーブル席はすべて満員であったため阿修羅たち7人はカウンター席に座ることになった。カウンターはコの字になっており、角を挟んで座っているためどうにか話が出来るのであった。

「そうね。阿修羅も私も恋もさっぱりわかんないから新しくでたところでもいってみる？」

メシルはそういってグリーンカクテルを頼む。カクテルといってもこのゲームでは酔うことがないため炭酸ジュースといったほうが正しい。

「わ、私もついていい？」

灯は熱でもあるのではないかというくらい顔を赤らめながら、阿修羅に聞く。

「んー灯がいれば頼もしいけど当てがないし、ギルドの問題って感じだからな。」

灯は基本的に生産プレイヤーであるためこの実のあるかどうか怪しい旅に連れ出すのは阿修羅としては申し訳がなかった。すると予想外の言葉でその申し訳なさが無駄なことだと悟る。

「で、では、私もギルドにいれてくださいー！」

灯は自分でも混乱していた。いままで散々ギルドの勧誘を断って、

ギルドなんて絶対入らないと決意したのは数日前。それにもかかわらず今自分は何を口走っている？

だがその思考を捨て考える。しょうがないじゃないか。突然現れた昔なじみの顔。ゲームであるにもかかわらず恋ではないかと錯覚してしまっていたその相手がギルドを作り、女を囲っている。自分もそれに加わりたい思うのは仕方のないことである。そう自分を納得させ阿修羅の返答を待つ。

「でも灯はいいのか？最初あったときなんか「そのときは気が立っていたんです！」「」

阿修羅の言葉はいつもの灯では考えられないほど大きな声の灯の言葉に遮られる。同時にギルドウィンドウに加入申請が届く。見る間でもなく、灯のものだ。

「まあ拒む理由もないし。よろしく灯。」

そういつて加入申請を受諾し、灯はモノトーンの一員となった。

天空の巫女（後書き）

次回投稿未定

## オアシス都市（前書き）

今回は短いです。

感想ありがとうございました。ギルド名がモノトーンとモノクロームがあったという事で、モノトーンに統一させていただきました。ありがとうございました。

## オアシス都市

「あー暑いな。」

阿修羅たちは今回のアップデートで実装されたオアシス都市『アクロポリス』へ来ていた。都市というだけあって先ほどここへ来るために超えてきた砂漠地帯が嘘のように高い建物が立っていた。道路はレンガできておりその両脇には木がきれいに並んで生えている。そのため日陰は多く、砂漠地帯よりまだ涼しいのだが、やはりそれでも気温は30度を超えている。

「そうね。ここまで再現しても不満しか出ないんじゃないかしら。」  
メシルは涼しい顔をして答える。

「お前がそれをいうな。」  
阿修羅はすかさずつつこむ。  
メシル今は体を氷で覆っている。『アイスドーマー』電属性攻撃を50%カットするかわりに移動速度が80%になる自強化スペルである。ただ、メシルの場合、電導の二つ名によつてすでに50%しか受けないため使うことはまずない。しかしどうやらアイスドーマーの温度まで再現されているためメシル1人だけ涼しいのである。

「もう道中でMP空っぽなの。涼しくなったからいいじゃない。」  
道中とはとつともなく暑く。異常ステートである『熱中症』が多発するほどであったため、メシルに周囲を氷で満たしながらこのオアシス都市に来ていた。砂漠も大型ダンジョンくらいの広さがあったため、さすがのメシルもMPがなくなつたようだった。道中でエンカウトした敵というと、サンドワームとサンドサーペントがいる。そのどちらも大型モンスターであり地面にもぐって移動するため、

阿修羅たちであつてもかなり時間が掛かった。モンスターのLVもサンドワームが70、サンドサーペントが72と新しくできた地域だけあつて高LVであつたため、何度か阿修羅たちと同じく苦戦しているPTを何度か見かけたがメシルのMPが尽きたら熱中症になること必須になるので避けて通つた。クツキの治療術であるヒーリングを使えば、異常ステートは消えるが如何せん暑かつたため、素通りという方法をとつた。

「にしても町の名前から想像していたけど、やっぱり丘か。」  
アクロポリス。古代ギリシアのポリスのシンボルとして知られているが、この都市にあるのが不自然でないのが、また不思議である。その丘の上には城が建っており灰色の高い外壁があるのが見て取れる。

少し丘に向けて歩いているとひどく開けた場所に着いた。その広場には何もなく、真つ先にここに向かつていたであろうプレイヤーが数人話していたり、広場の隅にぐるりと広げられた露天の品を見ていたりした。とはいつてもNPCの露天であるため、大方薬の補給であろう。

「んーないな。」  
阿修羅はすこし残念そうにつぶやく。

「きつとあるつて！あのおじさんに聞いてみよう！」  
恋が珍しく張り切っている。

今阿修羅たちが探しているのは転職なんてまったく関係ないである

うもの。

つまり食堂やらレストランやらである。

ゲームの世界であつてもなぜかお腹がすく。その仕様があるため、レストランや食堂、料理スキルがかなり重宝するのである。基本的にはゲーム内の時間で24時間に1度でいいのであるが、戦闘やスキルを使うと、よりお腹の減りが早くなる。阿修羅たちは今砂漠地帯を越えたばかりであり、このオアシス都市に着くまでに多くの戦闘をこなしてきた。メシルは氷の道を作るためのスキル使用回数が半端ではないであろう。

「いい加減きついかも・・・」

とまあこんな感じに珍しくメシルの弱気な言葉を聞けるのは普段からかわれている阿修羅からみるとかなり、愉快ではあるのだが自分も大分お腹がすいているのでそうも言ってもらえない。

そうこうしている間に恋はNPCであろう露天主に話を聞きかえってきた。

「あつちの通りに酒場があるってさー」

そういつて恋は片手を左側を指し、もう片手で阿修羅たちを手招きした。

「助かったー」

そして阿修羅たちは酒場に向かうのであった。

## オアシス都市（後書き）

男のギルド員を入れたいけど、阿修羅と愉快な仲間たちの中に入る男．．．んー思いつかない。もう男の娘でいいかな？それでもおもいつかない

翌日（前書き）

だいぶ時間が空いてしまいました。

## 翌日

奇声を上げ、巨体が砂漠に倒れる。巨体はサンドサーペントであった。巨体は大きな蒼い剣に串刺しにされており、その貫通したところを中心に氷に包まれていた。そのほかにも多くの傷があり、激戦の跡が見える。その傍らには燃えるような紅い髪の女がいた。女の手には蒼い剣があったが巨体が倒れると同時に碎け散る。すこしの間があき、すでに息絶えた巨体にもう一本の大剣が突き刺さる。女は自分のLVが上がったことを感じ、仲間である黒い外套を着ている。男のほうに振り向く。

「お、上がったか。」

すると少しはなれたところでサンドワームを倒し終えた男はそういつて女に近づく。

「さて、帰るか。」

そういつて男と女は遠くに見える、都市へと歩く。

灯との狩り、といっても戦闘経験の少なく、LVがやや低い灯のLV上げのために付近の砂漠でサンドワームとサンドサーペントを狩ったわけである。灯の場合、鍛冶をすることによってもLVを上げることが出来るが、それでLVが上がったところで戦闘経験がなければすぐにデッド判定を貰うのが落ちである。『モノトーン』はクエスト『異界の導』の達成を目標にしているので戦闘経験の欠如というだけで致命的なのである。そしてオアシス都市から近く、LVもちょうどいい砂漠へ行くことになった。やはり暑いためメシルを連れて行こうとしたが、暑いからやだと断られた。回復役にクツキに頼んでみたが、暑いから無理と断られた。アタッカー役に恋を誘ったがまだ寝ており、起こそうとしても起きなかったためしようがなく2人でいったのである。

「やっぱりこの外套は暑いな。」

そういつて阿修羅は日光を存分に浴び、触るのもためられるほど熱を帯びた外套の中にバサバサと空気を送りながらつぶやく。

「なら脱げばいいのに。」

メシルは朝から酒場で酒を飲んでいた。

「これ以外ないからな。それにこれでもアーティファクトだからな。」

阿修羅が身に纏っている外套、その銘は『死神の外套』。ビジュアル的にかなり傷んでおり、その見た目どおり防御力には乏しい。し

かし、気配隠蔽や速度補正、与ダメージ補正さらにはダメージの25%をカットするので防御力はそれで補っていた。今までソロで活動してきた阿修羅にとっては必要不可欠なものであった。気配隠蔽はもつとも重要であり、モンスターに先制攻撃、それも不意打ちというのは、ボス戦、雑魚戦ともに重宝した戦法である。相手に気付かれただけで、回避行動や防御行動をとられる可能性が出てくるため、確実に大ダメージの与えられる不意打ちは、パーティーでの狩りでもよく使われる。

「そういえば灯は？」

さきほど一緒に狩りから帰ってきたはずの灯の姿が見えない。

「ああ恋を起こしに二階にいったわ。昼過ぎなのにまったく起きてくる気配がないの。」

酒場の2階部分は宿のスペースとなっており昨日は酒場で派手に食べたあとはそのまま寝てしまった。

「ふーん。クツキは？」

クツキは今朝に会ってるため寝ているということもないであろう。

「あの子は露天を見に行ってるわ。ついでにMPポットを買ってくるように頼んどいたわ。」

さすがに昨日の移動で手持ちのMPポットがきれたのである。ダンジョン探索の場合難易度によってはアイテムベントリいっぱいまでMP、HPポットを持っていくのだが、今回は移動ということだったのでそこまで用意していなかったのである。

「んじゃちょっと待ってるか。」

そういつて恋が起きてくるのを待った。

待つこと数分。恋が起きる前にクツキが帰ってきた。アイテムインベントリギリギリいっぱいまでMPポットを買ってきたようだったがメシルがほとんど買い取っていた。もともと魔法系のプレイヤーはMPポットの消費は少なく、HPの回復はスキルで行えるので黒字であることがもっぱらである。しかしLVが上がりにくいいためそこまで人気があるわけでもない。その点戦士系統や攻撃魔法系統は序盤は経済的に厳しいとはいえ、LVが上がりやすくある程度育てば黒字策もとれるためほとんどのプレイヤーはその系統のスキルを上げている。ソロプレイに有効であろうと思われるヒーラー兼アタッカーであるが、回復と戦闘を同時にこなすことが出来ないため、使うものはほとんどいない。現に阿修羅もソロプレイヤーであったが、走術などで回避することを重きにおいていた。

「ねむいいー。」

そしておきてきた恋はそんなことをいいながら、1食とは思えない量の料理を注文する。わずがにはあるが先行組みのプレイヤーもいたため、かなり注目を浴びる羽目になった。小さな体の女の子の体の中に大量の食べ物が入っていく様子見慣れているとはいえかなりシニールであった。



## 翌日（後書き）

よければ感想、意見、誤字脱字の指摘などお願いします。

## 邂逅（前書き）

本当に申し訳ございません。新学期が始まったおかげでほとんど時間がとれずかなり間があいてしまいました。では最新話をどうぞ。

## 邂逅

「ここですね。」  
人が横一列に10人は並べそうな広い回廊が終わりを告げたと同時に黒髪の少女メルが主である阿修羅に伝える。

「行きましょう。」  
つぎに白髪の少女リルがそういつて広い回廊から何の隔たりもないさらに広い空間に進んでいく。

オアシス都市についた翌日すぐに砂漠の地下ダンジョン『カタコンベ』のボスモンスターである『意志をもつ岩』の討伐に成功し、それから数日は灯の経験値稼ぎとクツキの新しいスキルの検証などで時間を潰していたのだが、一向に転職に関わる情報が入ってこないため痺れをきらせたメルが別行動を提案し、全員賛成でオアシス都市で『モノトーン』のメンバーは一時別行動を取ることとなった。その後も阿修羅はメルとリルと共にカタコンベに籠っていた。現状で最高難易度のダンジョンだけあって阿修羅1人だけではかなり厳しいダンジョンであるのだが、メルが強化スキル、リルが弱体化スキルを習得したため、各自ある程度の敵の処理が可能になった。そしてその狩りから帰り、メルとリルを宿に残し、広いオアシス都市の中を周っているとある程度遅れてここにやってきたであろうプレイヤーの一団が広場の手前の狭い通路に座り雑談をしていた。阿修羅はそこまで短気でも、ましてはここで騒ぎを起こして面倒くさいことになるのがいやだったためそのまま、その付近の露天を見てプレイヤーがいなくなるのを待っていた。するとプレイヤーの一団の話し声が聞こえてきた。

「おい、ここのダンジョンの難易度やばいぞ、雑魚敵ですら1匹に3人以上でかからないとあつという間に体制を崩されてデッド判定だ。」

そう阿修羅からは顔は見えないが、やや太り気味の男が身振り手振りで話した。

「だな。明日は全員でいくべきだな。今日は抜け道のおかげで助かったが、また『魂を持つ火』に追いかけれちゃたまんねえ。」  
そういうのは小太りの男の隣に座っている痩せ型の男だ。頭にはバンドナ、そして顔はよく見えないがメガネ、またはサングラスをしているであろう。

どうも話を聞いたところによると、ここに座っている10人がパーティーを組んでいるようだ。しかし今日はここに来て初めの日だったため、ダンジョン探索組と町探索組に分かれていたようだ。10人中6人はダンジョン、残りが町だったそうだ。

はつきりいつてそこまで特別なことはないような他愛のない会話であつたわけだが、阿修羅が話しを聞いて気になったことがあつた。

『抜け道』このワードが頭に引っかけかかっていた。抜け道自体はダンジョンにおいて珍しいものではない、むしろほとんどのダンジョンにあるといつてもいい。その多くが隠し部屋や特別なアイテムなどの要素が組み込まれているような場所であるわけだがその発見者である一団は生存のことばかり気にしていて特別探索せずにオアシス都市に戻ってきたようだった。阿修羅は最深部の探索は完全に終え

ている。それにあの一団のLVを見ても、かなり浅いところにあると予想した。さらに『魂を持つ火』の出現場所となるとほぼ1点のエリアに絞られる。あの一団は明日、隠しエリアを探索するといった。阿修羅はすることを決め、先ほどまで、プレイヤーの一団が座っていた道を踏んで宿へと帰っていった。

「メル、リル、ダンジョン探索にいくぞ。」

宿の一室。といっても相変わらず酒場の2階に宿を取っていた。ここ以外にも宿があるとわかつてはいたのだが面倒くさいと思い、そのまま暢気に構えていて、いざ移ろうと思ったら、ここ以外の宿屋を一室残らず取られてしまったというなんとも間抜けな理由なのだが、だいた探索を終え、他のエリアへ行くプレイヤーも多くなり少しは開いてると思うのだが、ずっと住んでいることでなんともいえない愛着が湧いてしまったようだ。設備は良いとはいえないが、酒場がすぐ下にあるため、若干便利というわけだ。

「今からですか？」

メルはすでに、風呂を上がり、バスタオル1枚巻いただけの姿であった。阿修羅も初めのほうこそ、その姿にドギマギしたりしていたわけであるが、メルとリルが現れてから1ヶ月、ずっとこの調子なので、いい加減に慣れていた。

「ああ、それよりリルは？」

広いとは言えない部屋であるがこの一室を3人で使っている。いくら金欠だとは言っても1人一室宛がうくらの金はあるのだがメルとリルの2人が頑としてそれを許さなかったため、3人で一部屋という形になっていた。

「リルなら今日の清算に行っています。もうすぐ帰って来ると思いますが。」

「ただいま帰りました。」

メルのいうとおり、5分ほどベッドに寝転がって休んでいるとリルが帰ってきた。

メルとリルが揃ったところで、先ほど得た情報を話し、今からのことを話す。一般的にはかなり邪道な方法であるが、MMOでは情報が命。それを無用心に町の道のご真ん中で話していた一団も悪いであろう。

そしてたどり着いた巨大な空間。そこはここにくるまでとは比べ物にならないほどの数のモンスターが湧いていた。

「あれはッ！」

阿修羅はその大量のモンスターの奥に人型の影を見た。

待っていた

その影の低い声が、広い空間に響いた。

## 邂逅（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3370i/>

---

タナトス

2011年9月27日09時14分発行